

記事一中、二の事柄についての解説

王瑞豊先生夫妻の寄付で北京市百望山公園内に建てられた望郷亭について、ミシガン大学新聞の記者ジャクリーン・ホーワード嬢が書いた記事、「ミシガン大学研究者平和への願いこめて亭を建てる」(http://www.ur.umich.edu/0708/Sep24_07/spotlight.shtml)には、王瑞豊先生がインタビューで語った二つの話が載っている。未だ望郷亭と百望山公園を訪れた事のない友人に知って貰いたいと思い、私は、写真や資料を集めて、この二つの話を少し詳しく解説したいと思う。

第一の話：王瑞豊氏は北京農業大学在職中、研究室の窓から百望山公園を折にふれ眺めていたが、公園内にある百望山は、第二次世界大戦終了までずっと、遊撃隊が日本侵略者に抵抗して戦った前線であり、岩だらけの禿山だった、と語っている。

望郷亭のある百望山公園は、北京の西郊外に位置し、黒山扈という所にある。黒山扈は太行山脈に連なる小西山の東側の麓にあって、北京市内に通じる北の主要道路の一つが此处を通っている。伝えられる昔話では、北宋の時代（西暦約960年—1014年）に、当時の北の国境の国・遼の軍隊が侵入して来た際、楊家の楊延昭（楊六郎）将軍の率いる軍隊が遼の韓昌将軍と山の麓で戦った。楊将軍の母、余太君は黒山扈の小山に登り、山の東北、西北を展望して、この戦いを見つめ、果敢、壮烈に戦う息子を励ましたという。楊家の忠義、壮烈は、後代の人人に広く賞賛されるようになった。余太君の登った山は、「望兒山」と名付けられ、この辺一帯の山嶺は「太君嶺」と呼ばれている。余太君が戦いを見下ろした場所は「望兒台」とよばれて、余太君の肖像が立っている。（写真001,002,003参照）。1989年10月、北京市は、この望兒山の周りを森林公園に指定し、当時の北京市の責任者だった法学者張友漁氏の直筆で「北京市百望山森林公園」と名付けられ、望兒山は百望山と改められた。（写真004参照）

抗日戦争期の1937年9月8日、北平（当時の北京）の各界の抗日救国人士が国民抗日軍という連合編成軍を組織して、黒山扈（望兒山）で日本侵略軍と戦った。抗日軍は旧式の銃で日本軍の軍機一機を撃墜し、日本軍に痛烈な打撃を与えたという輝かしい戦闘記録がある。

1997年9月8日、北京海淀区と首都緑化・石碑管理局による、黒山扈抗日戦闘60周年記念活動の一環として、当時の遊撃隊員の生存者と戦死者の遺族が、ボランティアで植樹活動を進め、「遊撃隊の林」を造った。（写真005,006参照）

中国元国家主席・華国鋒氏は、抗日戦争期、太行山、県遊撃隊長であったことにちなんで、1996年10月、百望山公園に「太行前哨」と書いた直筆の石碑を建てた。（写真007,008参照）

第二の話：王瑞豊先生は、旧日本軍の兵士だった有志の人たちが、中国侵略に対する贖罪の気持ちを表す為に、寄付して建てた亭を見た、と語っている。この亭は、「中日友誼亭」である。（写真009参照）また、日本人、田栗栄太郎氏の書いた「賛郷愛林」（写真010参照）の

四文字を刻んだ石碑も建てられた。石碑の裏側には、詩一首が刻まれている。詩の大意は、日中両国人民は歴史的に往来を続けており、同文同種でもある。親善友好を進めることは当然の事である等が表されている。（写真 011 参照）

北京市の元責任者、鄭天翔氏は、「小西山造林緑化記」という一文（写真 012, 013 参照）の中で、1949 年中国解放当時、小西山は殆ど禿山といってよく、雨の日は泥が流れだし、風の日には砂塵が舞上がる、といった状態だった、と書いているが正にその通りであった。1954 年 12 月に出された北京市の造林緑化三カ年計画で、植樹活動が進められ、全市民挙げての努力で計画は完遂された。王瑞豊先生が話しているように、当時、農業大学の同僚達もボラティアで、土を入れた袋を担いで苗木を一本一本手で植えたものである。

数十年の間、年代を超えた人人の努力によって、今、百望山公園は樹木が茂り、四季それぞれの美しい景色を見せるようになった。公園には、歴代の指導者や各界の名士の直筆の石碑が数千も並び、文化石碑林を形造って仲々壯観である。そして、地域の人人のレクリエーションの場として親しまれている。

「前人の植えた樹の下で後人が涼をとる」の喩えの通り、百望山公園の素晴らしい景観の中を散策する度に、これは、多くの先人や庭園労働者の努力の賜物である！そして、王瑞豊先生夫妻のように、愛の心で、公園に一層の美観を添える為に奉仕して下さった人人の賜物でもある！と、心からの感謝の気持ちが湧いてくる。私達も、愛の心をもって、自分達の手で公園を益々美しくして行きたいとねがっている！

楊慶林

2008 年 3 月 12 日 北京にて

（林珠江 訳）